

学友かわら版



国際ロータリー第 2770 地区 学友会発行
第 12 号 令和 8 年 3 月 2 5 日

目次

1.	「学友かわら版」再発信に向けて……………	1
	学友会会長 小池剛史	
2.	新役員紹介……………	2
	幹事 小河原菜美	
3.	奨学生候補生の紹介……………	4
	浦田日和 羽石幸太郎	
4.	奨学生近況……………	5
	神田正樹 利根川あみ 張本宏光	
5.	編集後記……………	8

「学友かわら版」再発信に向けて

学友会会長 小池剛史
1999-2000 年度派遣 越谷 RC 推薦

長い間、ご無沙汰しております。RI2770 地区学友会会長の小池です。

最初に、お詫びを申し上げます。「学友かわら版」Vol.11 が 2022 年 5 月に発行されてから、もうすぐ 4 年近くが経ってしまいました。コロナ禍で大学での仕事の仕方ががらりと変わり(今はもう普通通りですが)、主にパソコンを使った事務作業に追われ、いつのまにか、RI2770 地区学友会の大切な活動の一つ、「学友かわら版」の発行が途絶えてしまいました。

それだけでなく、毎年秋口に行う総会も、2021 年 9 月を最後に一度も開催できませんでした。コロナ禍で活動が一気に縮小し、以前であれば集まって開催していたオリエンテーションや幹事会が全てオンラインで済ませるようになり、「活動」をしているという実感が薄まってしまったのかも知れません。

かわら版発行は滞ってしまったものの、毎年 6 月に奨学候補生の選抜試験への協力、その後のオリエンテーションへの参加は留まることなく継続していました。その中で、財団部門委員の役員の方々の皆さまから、学友会への大



いなる期待の声を賜るようになりました。何度か個人的にお会いして、財団と学友会の関係について熱く語ることもありました。また、最後の 2022 年発行の「学友かわら版」で奨学候補生として自己紹介文を書いて下さった小河原菜美さんが、留学を終えてオリエンテーションに見えて、学友会でお手伝いしたいと申し出て下さいました。このようなことがあり、すっかり萎えてしまった学友会の皆さまとの繋がりを取り戻さなければと思い、「学友かわら版」の本号の再発行に向けて準備を始めた次第です。

総会について、これまで通り秋口に開催できればと考えております。

これからも、細くとも長く学友会を続けてゆきたいと思います。何卒ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

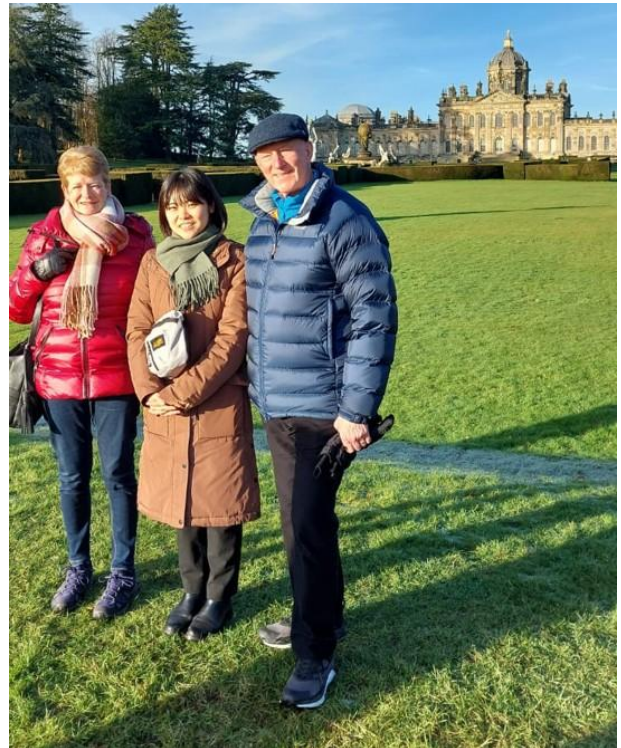
新役員紹介

学友会 幹事 小河原 菜美
2021-22 年度派遣 上尾西 RC 推薦

2021～2022 年度にかけてロータリー財団奨学生(上尾西 RC)としてご支援いただきました小河原菜美と申します。私は、2022 年 9 月から約 1 年間イギリス・ヨークの University of York にて応用言語学の修士課程を修めてまいりました。大学院留学は私にとって人生の大きな夢であり、この夢の実現においては、ロータリー財団奨学金がなくては叶えられないことでした。この場を借りて、留学実現のためにご尽力・ご支援いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

私は大学卒業後、埼玉県公立中学校の英語教員として勤務を始めました。日々充実し、やりがいを感じておりました。一方で、勤務し数年がたったこと、より指導力を向上したいという思いがこみ上げてきていました。「自分の指導は生徒に寄り添い、時代に合った英語力を伸ばすことができているのだろうか」と思い始めていたのです。グローバル・多様性が叫ばれる今、日本の学校教育で身につけるべき英語力とは何なのか、現場での実践を積んだからこそ改めて学問の視点で学びたいと思いました。

留学先での専攻は「応用言語学(英語教育専攻)」でした。言語が社会でどのような位置づけにあるのか、ということの本コースでは教育の視点から見つめるというものです。修士論文では、「日本の学校教育における国際語としての英語の必要性」について研究しまとめました。日本では米国や英国など英語を第一言語とする国の英語を模範とし指導してきている傾向がありました。しかし日本国内で生活する人にとって英語を第一言語として使用する人(米国や英国など)と接する機会より、英語を外国語として使用する人(中国、韓国など)と接する機会の方が多くなってきています。「米国や英国の英語を模範とすることだけに力を入れるのは実践力が伴わないのでは?日本人に必要なのは英語を母語としない人とのコミュニケーションができるよう



現地のロータリアンご夫婦とのヨーク地区日帰りロードトリップ

にするための英語が必要なのでは？」という仮説から英語教育に携わる方へアンケート調査を行いました。その結果、英語教育関係者は国際語としての英語の必要性に気づいている、その一方で、現実問題、教材やテストの実施などを考えるとある程度の模範を設定せざるを得ない、といった結果がみられました。研究を通して、現場で指導していた時に言葉にできないもやもやを学問としてまとめることができ、教育者としての自信に繋げることができました。

学問以外の留学生活も夢のように充実していました。高い志を持った同志との出会い、現地の方との交流を通して、イギリス・日本・自分自身について見つめ直すきっかけとなりました。滞在先ヨークでは、現地のロータリークラブの方と交流したり観光に連れて行っていただくなど異国の地でも安心して生活を送るのに非常に心強かったです。財団奨学生として留学させていただき通常の留学では見えない世界・人と繋がることができました。また、留学生活中に感じた大きなことがあります。現地の方々の価値観や生活スタイルを交流する中で触れたときに、「自分を大切にする」というぶれない信念をもっていることに気づくと同時に自分が忘れていたことだと思わされました。日本では忙しく目の前のことをこなすのに精いっぱいになり自分と向き合い大切にするのを忘れていました。人として大切な価値観を思い出させてくれる人と出会えたことは一生の宝となっています。

留学後は、教職にすぐに戻ることも考えたのですが、一度教職から離れたことをプラスに生かし、学校教育とは異なる場での教育に携わりたいと思い「公益財団法人教育支援グローバル基金」に入職しました。当基金では、「逆境は優れたリーダーを創る」という理念のもと、生育環境で社会的・経済的困難を経験した高校生・大学生



各国で英語教師として経験を積んできたコースメイトとの1枚

等を対象とした経済的支援(奨学金の支給)とリーダーシップ教育を行っています。この活動にする若者は、自分の思いや経験をどのように人・社会のために生かせるのか、リーダーとして社会を引っ張っていくのか、ということ自分の思いを徹底的に向き合いながら、日本国内外で活躍するリーダーたちと出会い視野を広げています。参加者の経験・思い、そして世界各所で活躍される方々との出会いから、教育者としてさらに知見を深めること

ができました。そして、来春(2026年4月)からは、改めて公教育(中学校)で学校教育に携わらせていただけることとなりました。現場での経験はもちろん、留学の経験、そして民間団体での知見を最大限生かし、これから生きる子どもたちが自分らしく生きていくために現場最前線で尽力してまいります。

末筆となりますが、財団奨学生として、ロータリーに関わる皆様との出会い・ご支援に心より感謝しております。財団奨学生としての名に恥じぬよう、ロータリーの「奉仕の理念」を忘れず、社会貢献してまいります。

奨学生候補生の紹介 ①

杉戸 RC 推薦 浦田 日和

こんにちは。この度、2026年度ロータリー財団奨学生候補としてご推薦いただきました、東京大学公共政策大学院修士1年の浦田日和と申します。

私はこれまで南アジアを中心に、気候変動が人々の移動や生計不安を生み、その過程で生じる情報格差や“語り”の対立が社会の緊張を高める構造に関心を持ってきました。大学内の政策提言コンペティションでは、異常気象による大洪水の甚大な被害を受けたパキスタンで、避難や移動に関する情報が十分に共有されないことで、「誰がどこへ行くのか」「どこに安全があるのか」をめぐって混乱や不安が生まれる構造を知り、リスクコミュニケーションの重要性を強く実感しました。また学部時代、南アジアの学生たちと議論する中で、同じ出来事でも語られ方が国や地域で大きく異なり、そのナラティブの違いが相互理解を阻む現実を目の当たりにしました。



二十歳の記念写真(私の第二の故郷、石川県金沢市兼六園にて)

一方で、語りには分断を超えてつながりを生む力があることも実感してきました。NHK WORLD JAPAN のワールドワイド語放送に携わり、歴史観や文化的背景が異なる地域へ情報を届ける経験を通じて、日本とパキスタンのあいだに小さな橋がかかる瞬間に何度も立ち会いました。番組をきっかけに興味を持ってくださったパキスタンのリスナーの方々から手紙をいただいたこともあり、相手の文脈を尊重しながら語りを届けることで、距離が縮まってくのを実感しました。

こうした経験を通じ、私は気候変動を起因とする移動が紛争リスクに転じる前に、適切な情報伝達と対話の基盤を整えることが平和構築の核心であると考えようになりました。

留学先では、気候変動による移動の増加や、情報が行き届かないことで生まれる誤解・対立のメカニズムを学び、対話と正確な情報共有によって、対立を暴力に進む前に抑制する仕組みづくりを探求したいと考えています。

この度は、このような貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

奨学生候補生の紹介 ②

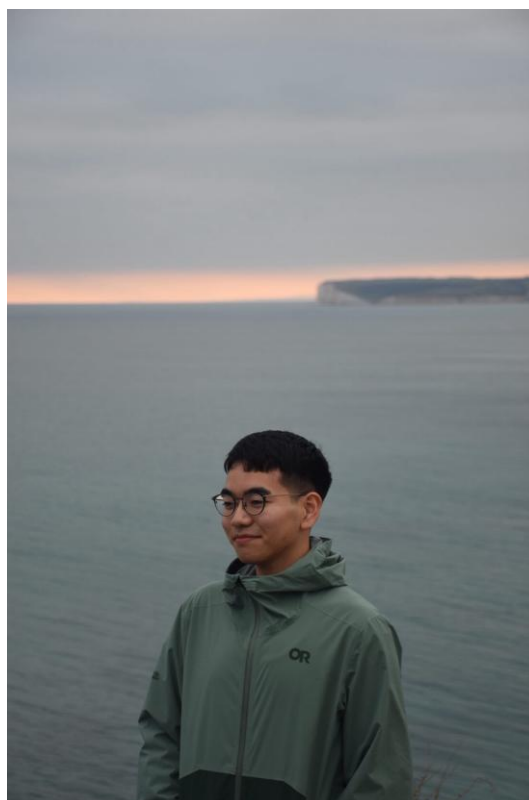
蕨RC 推薦 羽石 幸太郎

2026-2027 年度ロータリー財団奨学候補生に選出していただきました羽石幸太郎と申します。2025 年 3 月に日本の高校を卒業し、9 月よりサセックス大学に進学しました。

留学を志したきっかけは、ルワンダでのボランティア経験です。2022 年、ルワンダの幼稚園で 1 週間ボランティア活動を行いました。そこで目の当たりにしたのは、好奇心旺盛に学ぼうとしている子どもと、彼らの学びを妨げる高い留年・中退率、教員不足といった課題です。これらを解決する教育支援に携わりたいと思うようになりました。

大学では開発学を専攻する予定です。この学問は、貧困や紛争といった国際課題を、経済、政治、社会など様々な観点から分析、解決を図る学際的分野です。初年度は開発学の理論を広く学び、2・3 年時には教育開発の授業を履修して、専門性を深めていきたいと思えます。

現在、渡英して 1 か月程経ったところです。はじめは戸惑っていた英語での授業、寮生活にも慣れ、今は友達と一緒に勉強したり、街へ遊びに行ったりしています。卒業までの 3 年間、感謝の気持ちを忘れずに精進していきたいと思えます。改めまして、奨学金応募を推薦いただいた蕨ロータリークラブのみなさま、候補生として私を選び温かく迎えていただいた 2770 地区のみなさまにお礼申し上げます。今後もよろしくお願いいたします。



大学近くの観光スポット、セブンシスターズで

奨学生近況報告 ①

さいたま中央 RC 推薦 神田 正樹

皆様、初めてご挨拶申し上げます。国際ロータリー2770 地区さいたま中央 RC 奨学生の神田正樹と申します。疾病予防と治療の分野で奨学金をいただき、2025 年 6 月からアメリカのジョンス・ホプキンス大学公衆衛生大学院に留学しております。

私は、さいたま市に生まれ、県立浦和高校を卒業後、医学部を経て救急医として働いておりました。元々、医学生時代に、認定 NPO 法人 POMk Project における、中低所得国の健康教育活動に関わっていた経験を活かし、目の前の患者さんだけでなく、広い視野で多くの人の健康を守る公衆衛生学に興味がありました。



2025 年 7610/7620 地区会議に参加した際の写真

留学後は、以下の2つの研究に取り組んでおります。

1つ目は、2024年のネパールにおける血圧測定結果の横断研究です。この研究は、ネパール全土で実施された高血圧のスクリーニング活動の結果を解析しているものです。ネパールでは依然として高血圧の認識・治療・管理の低さが報告されており地域ベースでの改善を目指しています。この研究に関しては来年5月の卒業までに論文文化を目指しています。

2つ目は、ショートメッセージ(SMS)による健康介入に関するスコーピングレビューです。スコーピングレビューとは、特定の研究テーマに関する既存の文献を網羅的に調査する研究手法です。この研究では、高血圧、2型糖尿病、喫煙といった複数の非感染性疾患を対象に、SMSを用いた介入によって、複数の生活習慣病に同時に働きかける効果的な介入方法や、メッセージ内容の特徴を明らかにすることを目的としています。

これらの研究や授業を通して、医療格差や医療政策の重要性、地域医療従事者による支援体制の強化の必要性を強く実感しております。将来は、このような公衆衛生の知見を生かし、地域医療に貢献できる医師を目指したいと考えています。

現地では、ロータリーDistrict 7620の皆様大変お世話になっております。特に、ロータリアンであり、ジョンズ・ホプキンス大学で医師をしているJeffersonさんや、奨学生の面倒を見てくださるMariciaさんには、多くの場面で支えていただいています。Jeffersonさんの娘さんの誕生日パーティーにご招待いただいたり、MariciaさんにはBaltimore到着時に空港までお迎えに来ていただいたり、ご自宅で朝食をご馳走になるなどの交流が続いています。また、地区の例会にも参加させていただきました。現会長で弁護士をされているJackさんをはじめ、皆様にとっても良くていただいております。さらに、ボルチモアとワシントンD.C.地域の合同会議である、2025 Joint District 7610/7620 Conferenceにもご招待いただき、ワシントンD.C.で開催された3日間の年次会議にも参加いたしました。様々なプログラムの中で、2つの地域で奨学金をいただいている約10名の奨学生とも交流することができました。ロータリー財団を通じて、このように人の輪が広がっていくこと、そしてネットワークの強さを改めて実感しています。

最後に、小池剛史国際ロータリー2770地区学友会会長、岡村睦美パストガバナー、小林操、橋本洋子財団奨学・平和フェロー・学友委員長、田澤俊明カウンセラーを初め、多くの方々にサポートいただき現在留学ができています。感謝申し上げます。引き続き何卒よろしくお願い致します。



入学時オリエンテーションの写真

奨学生近況報告 ②

さいたま樺 RC 推薦 利根川 あみ

プラハの大学生活について

ロータリークラブの皆様、私はチェコ共和国カレル大学医第 1 学部 1 年生になる 2024-2025 年度にロータリー財団奨学候補生に選出していただき、その後、大学 2 年生になる 2025-2026 年度に正式に奨学生となりました利根川あみです。

私はルーマニア国籍の母がコロナ後 2022 年 10 月にガンで死去した後、悲しみを乗り越え、ルーマニア国にピアノで留学をしていた妹の世話をしながら、将来を考え、音楽大学受験(フルート専攻)を急遽やめて、医学部受験に変更をしました。しかし、ルーマニア国の音楽高校留学中に生物・化学・物理などの理系科目を取っていなかったため、ルーマニア国の医大受験をあきらめ、内申を見ず、大学入学テストだけで合否が決まるチェコのカレル大学第 1 医学部を受験し合格しました。この大学は 1348 年 Charles 皇帝が作った大学なので、英語では Charles University と言います。

世界で 17 番目に古く、東欧では一番古い大学のようです。

また、ロータリークラブの存在に関しては父が高校時代にインターアクトクラブに 3 年間所属して活動していた経験があるとのことで、奨学金についても父から教えてもらいました。ちなみに父はロータリアンではありません。

さて、この大学で 4 点ほど驚いたことがあります。

1点目は、チェコ共和国のプラハというすばらしい伝統ある町ときれいな風景の中に大学があり、毎日が夢のような生活をしていることです。

2点目は、日本では「海外医学部に留学する方は日本の大学に入れない人が多い」という噂がありますが、実際入学すると東京の名門医大に合格してまでも Charles 大学に来ている人や(非凡な私から見ても)天才的な人が多くいることです。

3点目は、東欧の医大では有名な「進級率」の低さです。

日本の医大の進級率は 95%程度と言われていますが、日本で有名な医学部留学先であるハンガリー国の医大は何故か 50%も定員超えて入学させるために、70%の人が落第するといわれています。一方でチェコ共和国の医大は私の学年は前年度の半数(89 名)しか合格していないのに、それでもおおよそ 40%落第しました。私は落第しないように何とかいろいろな方に聞きまくり、毎日 15 時間以上勉強をしましたが、毎回の口頭試問ではうまく英語で説明ができないこともたびたびあり苦戦をしましたが、幸運にも、2025 年 10 月からははれて 2 年生に進級し、ロータリークラブ奨学生の権利を得ました。大変うれしかったです。



プラハのカレル橋(Charles Bridge)
にて妹と撮影した記念写真

4 点目は、イスラエル人とインド人が非常に多いことです。

イスラエル人学生は全学生の 60%いますが、Charles 大学に限っては 3 年生が終わるとこのイスラエル人のほとんどがイスラエルに戻り、イスラエルの病院を回り、実践研修を繰り返してから卒業を迎えるようです。チェコの Charles 大学がイスラエル政府と契約をしているようです。このようなイスラエル人学生(4 年生から) の大移動はルーマニア国やチェコの他の大学では見かけない風景です。

ところで、チェコ・スロバキア共和国は 1993 年になるとチェコ とスロバキアは各自独立国となり、近年のウクライナ対応などをめぐり政治的な混乱はありますが、ロータリークラブは「チェコ・スロバキア合同の Youth Exchange (2240 地区)」という地区を温存し、活動を続けていることを知り、感動しました。今後この 2240 地区の各位と交流を企画していきたいと思えます。またご報告できることを楽しみにしております。また、重ね重ねこのような機会を頂けたことに感謝しつつ、今後とも猛勉強に励み、2030 年 10 月には落第せず、卒業までサバイバルする所存です。今後ともよろしく願いいたします。

奨学生近況報告③

浦和中 RC 推薦 張 本 宏 光

国際ロータリー第 2770 地区の皆様、ならびに学友の皆様、こんにちは。2024-2025 年度グローバル補助金奨学生の張原と申します。現在、私はイギリスのケンブリッジ大学のケンブリッジ幹細胞研究所にて、計算生物学(コンピューテーショナル・バイオロジー)およびバイオインフォマティクスの研究を行っております。具体的には「単一細胞 RNA シーケンス(scRNA-seq)」という最先端の技術を用いたデータ解析に取り組んでいます。私たちの体は無数の細胞からできていますが、この技術を使うと、一つひとつの細胞の中でどのような遺伝子が働いているのかを個別に調べることができます。私は特に、血液のもとになる「造血幹細胞」という細胞に注目し、加齢に伴って細胞がどのように変化するのか、また特定の薬剤に対してどう反応するのかを予測する数理モデルの開発を行っています。日々、膨大なデータと向き合いながらプログラミングコードを書く生活ですが、コンピューターの画面上に広がるデータの海から、生命の老化メカニズムや新しい治療へのヒントを見つけ出したときの喜びは計り知れません。



世界中から集まる優秀な研究者たちとディスカッションを重ねる毎日は、非常に刺激的で充実しています。次に生活面についてですが、研究の合間の息抜きと体力維持を兼ねて、趣味のウェイトトレーニングに励んでいます。データ解析は座りっぱなしの作業が多く運動不足になりがちですが、ジムで限界まで体を動かすことで心身のバラ

ンスを保っています。また、ウェアラブルデバイスを使って自身の睡眠やリカバリー状態もデータ化して分析しており、「自身の体のデータ解析」も日課になりつつあります。ジムで現地の友人も増え、研究室以外のコミュニティとしても大切な場所となっています。また、現地のロータリークラブとの関わりも、私の留学生生活を豊かなものにしてきています。ケンブリッジロータリークラブの例会に招待していただき、現地の様々な職業の方々とお話する機会に恵まれています。4月中には卓話のお時間をいただき、私の研究内容や日本の文化についてプレゼンテーションを行います。国境や世代を超えて奉仕の精神を共有できるロータリーネットワークの素晴らしさを、異国の地で改めて実感しております。最後になりますが、このような素晴らしい留学の機会を与えてくださった第2770地区の皆様、改めて深く御礼申し上げます。皆様のご期待に応えられるよう、残りの留学生活も一日一日を大切に、研究に邁進してまいります。末筆ではございますが、皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

【編集後記】「学友かわら版」第12号をお届け致します。2022年5月以来、3年半ぶりの発行となりました。

原稿を頂戴してから、数カ月も遅れての発行となってしまいました。原稿をお寄せ頂いた皆様、御礼とお詫びを申し上げます。何とか、このかわら版を、奨学生候補生、奨学生だけでなく、現在各分野でご活躍の学友の皆さまの記事で一層盛り上げたいと思います。どうぞ今後ともご協力のほど宜しくお願い致します。

（「学友かわら版」編集担当） 小池剛史）